

二〇二四年度

恵泉女学園中学校 第二回 入学試験問題

国語（四五分）（全一九ページ）

注意

- 一、開始のチャイムと同時に、問題用紙と解答用紙にそれぞれ受験番号と氏名を記入しなさい。
- 二、答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 三、字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。

受験番号
氏名

一、小学四年生の伸夫は、大きなネムノキがあるおじいちゃんの家が大好きです。おじいちゃんの誕生日の晩、大人たちがネムノキを切る話をしているのを聞いた伸夫は、怒り<sup>いか</sup>と悲しみでいっぱいになり、自分の部屋のドアを勢いよく閉め、そこにいたクモを死なせてしまいます。翌朝、それに気づいた伸夫は、言葉がとぎれとぎれにしか出なくなりました。伸夫は幼なじみの芳木くんに、ネムノキの話を持ち明けました。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には、一部改めたところがあります。)

「あのね。」と、ぼくは頭のなかのごちゃごちゃした考えをどこかにやりたくて、いった。「ぼくのおじいちゃんね、ぼくにうそをついたんだ。」

そういったとたんに、「うそをつく」ということばの意味がぐらぐらと揺<sup>ゆ</sup>れて、「うそ」というのが、いったいどういうことをさすのかがあいまいになった。「うそ」って、「ほんとうのこと」の反対語だったっけ。いやいや、それはちがう。「うそ」といってもいろいろあるから。まちがって、ほんとうじゃないことをいってしまうこともあるし、いいたくないと思っていることをぼやかしていることもある。そういうのも「うそ」ってことばでまとめてもいいのかな。

「北山くんのおじいちゃんも、うれしいのことでなんかいったの？」

「そうじゃなくてね。」

ぼくはネムノキのことを思った。いっしょうけんめいネムノキの姿を思い浮かべた。あのネムノキはおじいちゃんの自慢だったんだ。なのに、おじいちゃんはネムノキを根元からきろうとしたのだ。

「大事な木をね、『きる』っていったんだ。」

「ふうん。」

芳木くんはぼくの顔を見て、それから右手で左手の親指をかいた。そして「ふうん。」とまたいった。ぼくがなにをいいたがっているのか、わかっていないみたいだった。

「おじいちゃんの家のあるネムノキ。すごく大きい木なんだ。屋根よりも高くて。」

そこまでいうと、きゆうに声がふるえた。ネムノキのことはだれかにずっと話したかったのに、ことばにしようとするのと泣きそうになりそうで、だからいままでだれにもいえなかったのだ。

芳木くんはだまっとうなずいた。

「おじいちゃんはぼくに『いい木だろ』って、何度もいったんだ。それなのに、『きる』っていいでした。」

「どうして?」

「枝が折れて、車にあたったらこまるって。」

そういいながら、ぼくも心の底では、枝がよその人の車の屋根をへこませるのはこまると思っただけで、気に気がつかなかった。ネムノキ

## X

にはどんなものも傷つけてほしくない。それから、おじいちゃんが「ネムノキをきる。」といったのは、やっぱりあれは「うそをついた。」ってことじゃない、もっとべつのことだ、と思った。

「きつちやったの、その木？」

ぼくは首をふった。「でも、枝をいっぱいきられた。いっぱい、だよ。」

「ふうっ。」と芳木くんは息を吐いた。「ひどいね。」

ぼくはうなずいた。胸のなかでいろんな気もちがあばれていた。大きいネムノキをぼくは守れなかった、と思った。ネムノキはわざと枝を落としているわけじゃない。枝は自然に折れちゃうのだ。だからって、ネムノキをきり倒たおしているの？ そう思うと、またおじさんたちがしゃべっていたあの夜のことがよみがえってきた。同時に、むちゃくちゃ腹がたった気もちもよみがえった。おじさんが笑いながら木をきる話をしているのに、それを止めることができない自分がくやくして、悲しかったのだ。

「それから、その木、いま、どうなってるの？」

「わからない。見てないもん。」

そういつたとき、「うらぎる」ということばが頭に浮かんだ。おじいちゃんはずをついたんじゃないやなくて、ネムノキをうらぎろうとしたのだ。ネムノキだけでなく、ぼくもうらぎろうとしていたんだ。

「見てないの？」

<sup>(1)</sup> 芳木くんはすしおどろいたようだった。

「いつか、見るけど。」

「うん。」

「ほくね、もう帰るよ。」とほくはいった。

「あっちの美容院のほうから帰ったらいいよ。ほくがいつも学校に行ってる道。あそこの角をまがっていったら、ポストのところへ  
 てるからね。」

芳木くんは、さつきほくたちがぬけてきたせまい路地の入り口の先にならんでいる家のほうを指さした。遠くに美容院の看板が見  
 えていた。

(中略)

席について、「いただきます。」とスプーンをとった。

お母さんはむかいの席にすわって、ほくがプリンを食べるのをだまって見ていた。

ほくが食べ終わると、「おいしかった？」ときいた。

「おいしかった。」とほくはこたえた。

「アジサイの横にある三角形の石、あれ、なにかのお墓なの？」と、お母さんは庭を指さした。

「クモ。」

「どこにいたの、そのクモ。」

「ぼくの部屋。」

「死んだの？」

ぼくはうなずいた。

「ふうん。だからこのまえ、おがんでたのね。」

ぼくはだまっていた。

「そのクモのことがずっと気になってるの？」

ぼくはからっぽの皿を見て返事をしなかった。「気になっている。」というところ、お母さんに「そんなことで。」と笑われるような気がした。

「生き物が死ぬのは仕方がないことよ。」とお母さんはいった。

お母さんがじつとぼくを見ていることには気づいていた。でも、<sup>(2)</sup> ぼくはお母さんの目を見たくなかった。

「伸夫、あのね、プリンはね、卵とミルクでできているでしょう。卵はにわとり鶏から、ミルクは牛からもらってる。わたしたちはいろんな生きものから食べものももらってるよ。くだものや、野菜もそうだけど、魚や動物の肉ももらってるよ。」

ぼくは下をむいていた。お母さんがこれから話そうとしていることがなんとなくわかっていった。

「人間はね、生きもののいのちをもらって、それを食べて生きてるでしょ。クモだって、ほかの虫を食べて生きてるんだし、犬だって猫<sup>ねこ</sup>だって、いまはキャットフードやドッグフードになってるけど、それだってもとをたどっていけば、やっぱり動物の肉も含ま<sup>ふく</sup>れているでしょう。牛や山羊<sup>やぎ</sup>は草を食べているのを知ってるよね。それは仕方がないことなんだよね。生きるって、ほかの生きもののいのちをもらうってことなのよ。」

ぼくはそんな話はききたくなかった。そういう話はまえに学校でもきいた。ほかの生きもののいのちをもらって食べているんだから、食べものを残しちゃいけませんっていう話。

「それだけでなく、人間が生きていくためには蚊<sup>か</sup>を殺したり、ゴキブリを殺したりもしなきゃいけないでしょ。」とお母さんはいった。

ぼくの胸のなかでことばがあばれた。<sup>(3)</sup> 「ころす」ってことばが大きくなったり小さくなったりした。殺さなきゃなん

い、ってことば。木をきらなきゃならない、ってことば。生きるためには、ってことば。仕方がないのよ、ってことば。

ぼくの間から涙<sup>なみだ</sup>がぼろっとこぼれた。胸がどきどきしはじめていた。

「まあ、どうしたの。泣くようなことじゃないよ。」

お母さんはおどろいた顔で立ちあがると、ぼくのそばに来た。

「そんなこと、伸夫にはもうわかってることだと思っていたから。」

お母さんはそういういながらぼくの背中をなでた。

ぼくはその手をはらいのけた。そして、がたんと椅子いすをうごかして立ちあがった。

「あたりまえみたいに。」と、ぼくはお母さんからはなれながらいった。「きこえるけど。」

「伸夫。ちょっと落ち着いて。」

「なにもかも。」とぼくはいった。なにもかもをいっしょにしているの、と思った。人間のため、といったら、なにをしても平気なの？ 仕方がないっていったら、それ以上そのことについて考えなくてもいいの？ なんでもゆるされるの？ 人間が自分中心に考えていることと、クモがほかの虫を食べて生きていることをいっしょにしているの？ なにもかもをいっしょくたにして、仕方がないってことで、おしまいにしていいの？

「お母さんのいい方がわるかったかもしれないわ。」とお母さんはいった。

「いや。」とぼくはいった。「ちがうんだ。」

のどのところで、いろんなことばがごちゃごちゃにからまっていた。

「それはね、一つひとつ、べつのこと。」と、ぼくはやっといった。

「伸夫。」



「仕方がないっていうけど、でも。」

ぼくはお母さんを見た。たぶん、にらむような目で見たと思う。

「わかったよ。わかったから、もう。」とお母さんはいった。

ぼくは自分がいおうとしているどのことばも役にたたない気がしていた。

「ぼくには正しい答えなんかないから。」

それだけいうと、ぼくはソファのところへいった。そしてソファに倒れこんだ。ひざ掛けを頭からかぶった。頭のなかにはいろんなことばがごだましていた。

お母さんがそばに来たのがわかった。

「伸夫。」

ぼくは返事をしなかった。ぼくは自分がなにをいおうとしていたのか、自分でもわからなかった。ただ、あの死んだクモはたくさんの生きもののなかの一匹<sup>ひき</sup>ってことじゃなくて、あのクモはあのクモだったんだ、とそれだけははっきりしていた。

「伸夫がとても大事なことを考えようとしているのはわかるけど。」とお母さんはいった。

「むこうへ行つて。」とぼくはいった。

「だけどね。」

「ねえ。おねがいだから、むこうへ行つて。」

ぼくからはなれていくお母さんの足音がきこえた。

ぼくはぎゅつと目をとじた。体を丸めてしずかに息を吸って、吐いた。

すこしずつ胸のどきどきがおさまってきた。あの死んでいるクモを見つけた朝のことがよみがえってきた。

あの朝、ぼくがクモを殺したのがわかったとき、なにかがばちんと割れたような気がしたのだ。そして、自分だけがぼんと、なにかの外側にはじけてでてしまったような、そんな気もちになった。たとえば、みんながあたりまえとと思っている「ふつうのこと」の外側というか。

まえの晩に、おとなにむかっていった「ばか」ってことは、まだぼくのなかに残っていて、そのことばがぼくをぐるぐる巻きにしていた。おとなを「ばか」っていえるの？ と思つたら、おじさんたちにむかっていったときにははっきりわかっているはずだった「大ばか」ということばの意味がわからなくなったのだ。

なんでもないと思つていた「ふつうのこと」の外側にでてしまったとたんに、<sup>(4)</sup> 大きい悲しみで胸がいつぱいになったのだ。どんなことばでその気もちを否定しようとしてもしきれないような悲しみだった。

(岩瀬成子『ネムノキをきららないで』より)

問一 X 「」での「ぼく」の心情変化の説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 芳木さんと話しているうちにネムノキの枝を切られた悲しみで胸がいっぱいになった。ネムノキにはどんなものも傷つけてほしくはないが、だからと言ってネムノキを守るよい方法をおじいちゃんたちに提案することもできない自分をふがいなく感じている。

イ 話しているうちにおじいちゃんの言いたいことも分かるような気がしてきたが、おじいちゃんが木を切るといったあの晩の怒りや悔しさが再びわきあがった。そのような複雑な自分の気持ちを整理しきれない中で、おじいちゃんを責めたい気持ちになっっている。

ウ おじいちゃんがうそをついていたのは、木よりも近所からの評判を気にしていたせいだと気づいた。そのような大人の事情を理解しつつも、ネムノキを大事に思う気持ちは抑えることができず、おじいちゃんに対する激しい怒りとなって、「ぼく」の中で暴れている。

エ おじいちゃんの発言が矛盾していることに気づき、おじいちゃんにうらぎられたことがはっきりと分かって怒りがこみあげた。そのうえ、あの夜おじいさんが笑いながらネムノキを切る話をしているのに反論できなかった自分を思い出し、悔しく悲しく思っている。

問二 芳木くんはすしおどろいたようだったとありますが、なぜですか。説明しなさい。<sup>(1)</sup>

問三 ぼくはお母さんの目を見たくなかったとありますが、なぜですか。その理由を説明したものととして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。<sup>(2)</sup>

ア 生き物の死について淡々と語るお母さんの冷たさに悲しくなったから。

イ クモの死なんかにこだわっていることをお母さんにばかにされるのが怖くなったから。

ウ 生きることの厳しさを受け入れられない自分の幼さが恥ずかしかったから。

エ 生き物が死ぬのは仕方がないというお母さんの言葉を受け入れられなかったから。

問四 「ころす」ってことばが大きくなったり小さくなったりしたとありますが、どういことですか。説明しなさい。<sup>(3)</sup>

問五 大きい悲しみで胸がいっぱいになったのだとありますが、なぜ悲しくなったのですか。具体的に説明しなさい。<sup>(4)</sup>

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には、一部改めたところがあります。)

黒い目をまん中にぐつとよせて、どこかを見ていた子どもが突然いいだした。

「ぼく、椅子になりたいよ」

おや、おや、と大人は思う。もっとましなものに……

だれでも心のどこかで今と違うものになりたいと思うことがあるのではないだろうか。

椅子になったらどんな気分だろう。毎日毎日椅子でいるのって……ますます黒い目はまん中によってきて、なにかを見ている。想像してる。このときこの子のなかで扉が開く。ちよつと違う世界に通じる扉だ。

昨年(二〇〇三年)の夏、方々の家の塀に蟬の抜け殻がいっぱいしがみついていた。それをそつと取ってきては、窓辺に並べていった。数は増え続け、長い行列になった。それを見ているうちに、とても面白い形をしているのに気がついた。見れば見るほど、へんてこに面白い。なんでできていいのかわからないけど、この世のものではない、特別な材料に見えてくる。形も、地球のものとは思えなくなってくる。どこかの世界のなにか……でもやっぱりこれは乗り物だろうな……。地球にしのびこんできた怪しいものもの乗り物かもしれない。上のぱかっとならっているとところは入口だ。私の目もあらぬ方に寄りだした。目はじっとしているけど、心はいそがしく動いてる、どこかにむかって。私にも、扉が開きだす瞬間だ。

本にも扉というページがある。表紙を開いて、もう一つ開く、するとそこに少しこぶりのタイトル文字がまたあらわれる。そこが扉という名のページで、さあ、あけて物語の世界へいらっしやいと呼んでいる。ここらあたりが世界が変わる境目なのだ。わくわくしてくる。<sup>(1)</sup> このページを扉という名前で呼ぶのがとても素敵だ。

あるときオランダの作家にこのページをオランダではなんというのか聞いてみた。「タイトルページか、ファーストページ」という答えが返ってきた。私は **A** 高々でいった。「日本では扉というのよ。いい名前でしょ」。彼は **B** をまるくして、感心してくれた。

それで他の国ではどうしているのか調べてみた。

英語 タイトルページ (title page)

ドイツ語 ティーテルブラット (Titelblatt) タイトルページ

フランス語 パージュドゥティトル (page de titre) タイトルページ

オランダ語 ドイツ語に同じ

スペイン語 ポルターダ (portada) 玄関<sup>げんかん</sup>

イタリア語 フロントスピジオ (frontespizio) fronte 頭、正面

中国語 fei-yè (扉页) 頁 ページ

扉とつくのは日本だけではないとわかった。中国は漢字の国だからおなじで当然に思えるけど、スペインに扉を意味するポルターダという言葉がついているのはなぜだろう。いろいろ考えてみると、それぞれの国の物語への思いなんかがわかって面白いかもしれない。

泣き虫時代、私も扉をあけて物語の世界へ小旅行をして、心が慰められた。『指輪物語』のJ・R・R・トールキンさんは、『ホビットの冒険』という作品の副題に「行きて、帰る物語」という言葉を記している。物語は扉をあけて、行って、また帰ってくるという心の旅そのものなのだ。

扉というページをあけて入った物語の世界にも、もう一つ扉の役割をするものが書かれていることがある。

このところのファンタジーブームのきっかけになった「ハリー・ポッター」にも、キングズ・クロス駅の9と3/4番線という扉がある。そこから列車にのって、魔法学校に出かけていき、物語は本筋に入っていく。このようにさらに物語の奥へと導く扉は、本当の扉でないこともある。たとえば川、一本の棒というようなものだって扉の役目をし、こっちとむこうの世界の境目になったりする。この扉をあけ、境目を越えようとするこの瞬間は、むこうの世界が見えないから、とつてもわくわくさせられる。そこを通過すると、違う世界が広がっていく。

目下、大流行のファンタジーと呼ばれている物語では、魔法が飛び交い、善と悪の戦いがあり、たいてい善とされているものが（どれが善で、どれが悪かというのはなかなかむずかしいけど）、しかるべきところに落ち着き、世界は変わり、主人公はある種の成長をとげるといふ作品が多い。この種の物語は「ハイファンタジー」といわれ、不思議な世界を構築するきらびやかな技が見せ所になる。それはそれで、結構たのしい。なにごとにも冒険をしたいほうだから、いつかは超きらびやかなファンタジーを私も書いてみたいとひそかに思っている。そのために、ひまをみては書きたい世界の設計図みたいなものを楽しみながらかいている。でも相対する世界を作るのは、魔女の視点、「きれいは きたない、きたないは きれい」と思っている私にはなかなか難しい。でもそうでない世界だってあるはずなのだ。冒険してみよう！

でも、<sup>(2)</sup> ファンタジー物語に形のようなものが出来てしまいがちなのはつまらない。不思議だって、ちょっとした不思議や、ものすごい不思議だってある。日常に限りなく近いのに、でもびっくりするような不思議を書いてみたいとずっと思っている。

ロンドンで三カ月ばかり一人暮らしをしていたことがあった。<sup>(3)</sup> ある日の午後、地下鉄に乗るため、エスカレーターで降りていった。今はもうなくなってしまったが、木製の古いタイプで、ガタン、ガタン、ガタンと大きな音をたてて、恐ろしいほど深いホームをめざして降りていく。ガタン、ガタン、ガタン。両側の壁には同じ大きさのポスターが同じ間隔でならんでいて、目の前をつぎつぎと通り過ぎていく。読もうとすると、英語なので、全部意味をつかまえないままとぎれとぎれの言葉と絵が、頭の中に残っていく。耳にはガタン、ガタンの音。いつの間にかそれがダウン、ダウン、ダウンときこえてきた。そのとき私は学生の頃、英語で読



んだ『不思議の国のアリス』を思い出した。変なウサギにつられ、アリスは穴に落ちていく。「ダウンダウンダウン」。たしかこう言葉が続いていたように思う。すると何かが見えてくる。手を伸ばしてさわろうとしても過ぎていく。ダウン、ダウン……あれれ、わたし、アリス体験してるかもと思った。童話作家の思いこみすぎ……やがて地底は近づいてきて、水キセルをくわえるいもむしよろしく、サックスをふくアフロあたまのおにいさんがいるホームがあらわれた。このような穴がないと、不思議の国のアリスが不思議にならない不思議、また読者もいっしょに落ちていかないと、物語の参加者になれないという不思議！「ダウンダウンダウン」と、エスカレーターの音に合わせて口ずさみながら、アリスの作者、ルイス・キャロルさんの時代にもエスカレーターってあったのかしら……と妄想はひろがっていった。

不思議な物語にはいつていくとき、その先の世界がすごく面白いことを暗示させるのに、この扉の役目はとても重要だ。こっちらちよっぴりあけて、むこうの世界をちよっぴり見せて。このちよっぴりは、とめようもなく読むひとに大きな期待を抱かせる。この部分にまず書き手自身がわくわくすることができれば、物語はもう半分はできあがり、もしくは成功したといえるかもしれない。「〈むこう〉と〈こっち〉」、そんなに離れたところではなさそうなのに、間をつないでいる「と」の意味するところは、とっても豊かでエネルギーがたっぷり詰まっているとこころらしい。<sup>(4)</sup> その力にめぐまれたとき、物語は生き生きと動き出す。

(角野栄子『ファンタジーが生まれるとき』より)

問一 このページを扉という名前と呼ぶのがとても素敵だ<sup>(1)</sup> とありますが、どのような点が「素敵」なのですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 本とは無関係な「扉」という言葉が読者の好奇心を刺激し、未知のことに挑戦する勇気を与えてくれる点。

イ 「ページ」というカタカナ語を「扉」という親しみやすい言い方に変換し、子どもらしい素朴さを強調している点。

ウ 本が読者を別世界にいざなうことを現実の「扉」の役割と重ねて、分かりやすくイメージさせる点。

エ どんな建物にもある「扉」をたどる使用することで、多くの人がファンタジーに興味を持つように導いている点。

問二 A、Bには体の一部を表す漢字一字が入ります。あてはまる漢字をそれぞれ答えなさい。

問三 ファンタジー物語に形のようなものが出来てしまいがちなのはつまらない とありますが、「形のようなもの」とは具体的にどのようなものですか。四〇字以内で説明しなさい。<sup>(2)</sup>

問四 ある日の午後、地下鉄に乗るため、エスカレーターで降りていったとありますが、この体験から筆者が言いたいこととして

最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 非日常の不思議な世界は、実は日常の延長線上にあるということ。

イ その物語が誕生した国に行けば、物語の追体験ができるということ。

ウ 不可能に思えることも可能に変わることがありうるということ。

エ 地下に降りるといふ身体的な条件の変化で、不思議な世界に行けるといふこと。

問五 その力にめぐまれたとき、物語は生き生きと動き出すとありますが、どういふことですか。説明しなさい。

問六 本文の内容に合っているものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 誰でも今と違うものになりたいと想像することがあり、筆者も地球にしのびこんできた怪しい乗り物になりたかった。

イ 「ハリー・ポッター」の9と3/4番線は、「9」と「4」といふ設定によって魔法の世界がもつ不吉さを表している。

ウ 筆者はつらいときに物語を読んでその世界に入りこみ、まるで旅をしてきたかのように心が慰められる経験をした。

エ 「タイトルページ」の呼び名はスペイン語や中国語だけでなくイタリア語でも「扉」にあたる言葉になっている。

三、次の①～⑤の文のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 全ての問題を解くのはヨウイではない。
- ② 一万人のシヨメイを集める。
- ③ 富士山のトウチヨウに成功した。
- ④ 三年ぶりに生まれ育った町にキキヨウする。
- ⑤ 道路のカクチヨウ工事を行う。